

学位請求論文審査報告要旨

2013年2月13日

申請者 趙秀全

論文題目 日本文学の中の孝文化—平安時代を中心として—

論文審査委員 河添房江
尾方一郎
高橋忠彦

1. 本論文の内容と構成

本論文は、平安時代を中心に、漢詩や物語文学など古典文学における「孝」を分析することで、古代日本における孝文化の浸透とその展開を考究したものである。「孝」については「孝道」や「孝思想」という表現があるように、捉え方が必ずしも統一されていないのが現状であるが、大陸に由来する「孝」が日本に受容され、社会に適応する形で滲透したことに鑑みて、「孝文化」とするのが実態に即した捉え方であると趙氏は考えている。

古来、「孝」自体に関する研究は盛んに行われてきたが、日本古典文学を中心に据えて「孝」を分析する研究はほとんど進展していないのが現状である。さらに「孝」を儒教的または宗教的な観点から捉える先行研究は見られるものの、本論文ではどちらの立場にも縛られず、歴史的、社会的要素も視野に入れて、参照可能な日中の文献資料に多く当たりながら分析を進めるといふ、意欲的な試みを展開している。

本論文は三部構成で、中日の「孝」の受容の展開を辿り見た第一部、平安漢詩と六国史の「孝」の受容を扱った第二部、平安・中世の物語文学における「孝」の展開を考察した第三部から成り立っている。

本論文の目次は、以下の通りである。

序

第一部 古代日中における「孝」の歴史的展開

第一章 中国における「孝」と『孝経』の展開—漢・魏晉南北朝・隋唐—

第二章 日本における「孝」と『孝経』の展開—奈良朝以前から平安朝まで—

第二部 公的空間における文学と「孝」—漢詩と史書をめぐって—

- 第一章 『孝経』に関わる漢詩―「釈奠」を中心に―
- 第二章 「書始」と『孝経』
- 第三章 公・私的空間にみる天皇の孝徳
 - ―六国史と『源氏物語』への考察を中心として―
- 第三部 私的空間における文学と「孝」―物語文学を中心に―
 - 第一章 『うつほ物語』の俊蔭巻にみる「孝」
 - ―源順の「五嘆吟」との関わりを通して―
 - 第二章 『源氏物語』における「孝」
 - 第一節 紫式部と「孝」
 - 第二節 密通と「孝」―光源氏を中心として―
 - 第三節 夕霧の「孝」―光源氏・夕霧の親子の絆―
 - 第四節 内大臣の「不孝」―母大宮との軋轢から―
 - 第五節 玉鬘と近江君の「孝」―蛭巻・常夏巻を中心に―
 - 第三章 『浜松中納言物語』における「孝」―中納言を中心として―
 - 第四章 孝文化の中世的展開―『松浦宮物語』にみる「忠」と「孝」―

むすびと今後の課題

参考文献

初出一覧

2.本論文の概要

本論文は三部構成となっているが、「序」では本論文の分析の視角とその意義、先行研究における問題点に言及している。さらに特に平安時代の文学に焦点を絞った理由について提示している。

第一部は、「孝」に関する基礎的考察として、主に歴史的文脈から日中両国における「孝」のあり方や、『孝経』の受容の変遷を把握することを目的とするもので、全二章で構成される。

第一章では、儒教経典で「孝」の集大成と目される『孝経』の成立及びその内容に注目している。その上で、『孝経』の歴史的展開を把握するために、漢代から隋唐までの歴史を射程に入れて、『孝経』が目まぐるしい王朝交替にもかかわらず重要な位置を保持し、隋唐の時代になると、「孝」が爛熟した文化になった点を確認している。

第二章では、奈良以前から平安にいたる歴史に焦点を当てて、それぞれの時代における「孝」の受容の様相を捉えている。奈良朝以前における「孝」の有無を確認したうえで、『大

宝律令』以来、奈良・平安朝の孝行奨励の実例を、六国史にもとづいて整理し考察している。同時に、孝謙朝と清和朝に見られる『孝経』に関する二度の改革にも注目している。家ごとに『孝経』を所蔵するよう命じた孝謙天皇の勅命、唐の玄宗注の『御注孝経』を大学寮のテキストとして用いるよう命じた清和朝の姿勢、これらの改革は単に大陸文化を模倣することに止まらず、日本での孝文化の普及を助長する上で、大きな意味があったことを確認している。

第二部は、公的空間に属する文学を考察の対象とし、平安官人の漢詩や、六国史にみえる天皇の孝徳を検討したもので、全三章で構成される。

第一章では、平安時代における重要な行事の一つである「釈奠」に着目し、儀式後の作展会で詠まれた『孝経』に関わる漢詩を主な考察対象としている。ことに官人であり漢学者でもある菅原道真や大江匡衡などの詠作について、それぞれの詩の意味の確認作業を行った上で、詩に託された官人たちの真意を掘り下げている。

第二章では、これまでの「書始」の研究史を踏まえながら、日中の史料にもとづき、「書始」の初出例に対する再検討を行なっている。その上で一条天皇の皇子である敦康親王の「書始」の儀に注目し、その場で詠まれた漢詩群に考察を加えている。第一・二章を通しては、『孝経』の儀式への関与に焦点を縛り、文人や貴族の詠んだ漢詩から、公的世界における「孝」や『孝経』の新たな意義を明らかにしている。

第三章は、古代天皇の孝徳を考察したもので、六国史と作り物語の『源氏物語』を手がかりとしたものである。最初に物語と「日本紀」すなわち六国史とを比較し、その関連性を示している。続いて六国史から天皇の孝徳にかかわる記事を析出し、その出典を提示した上で、天皇の孝徳に対する描写と、それぞれの官選史書にみえる描写との共通性を指摘している。特に『日本書紀』にみえる天皇像の固定化が後世へ与えた影響とその意義を述べている。さらに、歴史書において、儒教的な有徳為君の仁政思想がいかに受容されたか、その様相を検討している。それを踏まえた上で、『源氏物語』の桐壺帝の遺言への不履行により、「不孝」を犯した朱雀帝について考察している。史実を旨とする歴史書と、虚構を旨とする物語は、一見して相容れないようでありながら、実は「孝」を仲立ちとして、深く関わっていることを確認している。また歴史書と物語との比較を通して、天皇の孝徳の重要性を明らかにしている。

第三部では主に物語文学を取り上げており、具体的には『うつほ物語』『源氏物語』『浜松中納言物語』『松浦宮物語』といった作品を考察の対象としている。同時に日記文学、歴史物語など、他のジャンルの作品を補強材料として活用し、個々の作品に語られる「孝」の在り方を論じている。第三部は全四章で構成される。

第一章では、『うつほ物語』とその作者と有力視される源順の「五嘆吟」との関わりを中心に考察している。先行研究では『うつほ物語』の仲忠孝養譚は中国大陸から伝来した『孝子伝』を典拠として構想されたと考えられてきたが、本章では研究史を再検討し、源順の

「五嘆吟」を介在させて、『孝子伝』とは別に三史や『晋書』、『三国志』など、新たに典拠と目される文献を提示している。そこから『うつほ物語』が人物造型に「孝」を色濃く投影した作品であり、平安物語にあっては極めて特異な作品であることを指摘している。本章は出典研究を中心とするが、作者と目される源順がこの物語を通して伝えようとした思いにも言及している。

第二章では、『源氏物語』に登場する人物を中心に、『源氏物語』における「孝」の在り方を論じている。まず第一節では、『紫式部日記』に見られる『孝経』の記録について分析することにより、作者である紫式部と「孝」との関わりを明示している。その上で『源氏物語』における「孝」の用語例を分析し、その特徴を指摘している。

第二節では、光源氏を中心に、密通と「孝」「不孝」の意識との関係を明らかにしている。法的には光源氏の密通は「不孝」に繋がるものである。しかし、光源氏に「不孝」の意識はなく、あるのは宗教的な罪の意識だけである。父桐壺院の遺志を守る彼の振舞いを考察し、そこに「孝」や「忠」の意識があることを論じている。さらに本節の結びでは、一条天皇と敦康親王、唐の太宗と高宗という日中の史実にみえる親子関係が桐壺帝と光源氏の親子と重なり、物語の発想の源泉であることを再確認している。

第三節では夕霧を対象とし、父光源氏への「孝」を取り上げている。夕霧は光源氏の厳しい教育のもとで学問に励んだ点や、藤原師輔の家訓である『九条右丞相遺誡』を媒介として夕霧の孝心を再検討し、源氏親子の在り方を確認している。

第四節では、『源氏物語』で光源氏に次いで重要な男性である内大臣に注目し、内大臣の母への孝心が、権力闘争の中で変化していく様相を確認している。内大臣の人物造型を通じて、官人の理想の「孝」との間にズレがあることを論じた上で、物語の意図についても述べている。

第五節では、蛍巻・常夏巻に登場する対照的な人物である玉鬘と近江君を取り上げている。光源氏と玉鬘という擬似親子が交わした言葉に「不孝」があり、この「不孝」に関する諸注釈書の言及を確認しながら、「不孝」の意味を検討している。内大臣と近江君の実親子の間にも、「孝」を含んだ会話が交わされる場面があり、光源氏が玉鬘に「孝」を求めるに対して、内大臣は近江君の「孝」を拒否していることを指摘している。平安時代の女性の「孝」はどこに求められていたのか、中国の古典文献との比較を試みながら考察している。

続いて第三章では、『浜松中納言物語』に登場する中納言を中心として、唐后との関わりを含めて、「孝」の在り方を考察している。中納言は孝養の志をもって唐で転生した父に会

うために唐へ渡るが、物語の舞台を異国に据えた『浜松中納言物語』と他の物語に見える渡唐譚の場面と比較した上で、『浜松中納言物語』の独自性を考察し、中納言の「孝」の物語における位置についても論じている。

第四章では、『松浦宮物語』の主人公である氏忠の「孝」と「忠」を中心に、作中に見られる彼の親への「孝」と唐帝への「忠」との葛藤について考察を行なっている。さらに、遣唐使とともに渡唐して玄宗皇帝の寵臣となりながら帰朝を果たすことのなかった阿倍仲麻呂の事蹟が、作品に投影している可能性を指摘している。最後に氏忠の「忠」の問題から、中世社会で活躍した武士の「忠」との関わりを提起して、本論を終えている。

「むすびと今後の課題」では本論を総括し、『松浦宮物語』を媒介として平安文学における孝文化の位置を後代から照らし返すとともに、中世文学における孝文化へと研究を進めるための展望を示している。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果についてであるが、まず**第一**に、孝の思想ではなく文化という観点で、日中比較文学の方法から意欲的に研究に取り組んだ点が挙げられる。近世以前の「孝」に関する日本の研究の現状では、「孝」を「孝思想」と捉えて、「孝文化」と捉えないことを趙氏は問題視している。一方、中国では「孝文化」「孝道文化」と捉える研究が多いので、それを発想の起点として、「孝思想」ではなく広く「孝文化」のあり方を追求し、難解な古典作品まで分析の範囲を広げたことは高く評価できる。

第二の成果としては、古典文学の分析を進める前の基礎的作業として、中日における『孝経』の受容の変遷を六国史など歴史上の史料を用いて丁寧に整理した点が挙げられる。そのことによって、『孝経』がいかに帝王学の必読文献であったか、天皇の徳目において孝徳がいかに重要視されたかが証明された。またそれが規範となって、『孝経』の「孝」がいかに広く平安の貴族社会に根づいたかを明確化したのである。

第三の成果は、平安の物語文学の研究で、「孝」の問題を通史的に辿った分析は殆どといってよいほどなく、その意味で本論が画期的意義を有する点である。しかも平安の物語文学における「孝」が、プロットの展開に伴いアクティブに変化を見せていることを分析し、それぞれが作品研究として高い学術的水準にあることも評価されよう。

たとえば第一章の『うつほ物語』論では、俊蔭の造型に漢学による出世という父への「孝」、仲忠の造型に史書の孝子伝のような母への「孝」という二つの理想が対比的に語られることを明らかにして、鮮やかな分析になっている。また『源氏物語』の分析では、研究史を

丁寧な踏まえながら、朱雀帝の父院への「不孝」、密通によって損なわれない光源氏の「孝」、夕霧の儒教的な孝子像など、多様な「孝」の位相とその交響を詳らかにした点は高く評価される。中でも内大臣が権力志向のあまり、母への不孝を犯していく有り様を炙り出した第二章第四節は秀逸である。また同第五節で『源氏物語』の女性の「孝」が、中国のような婚家の義父母に向けられるものではなく、婿取婚の制度にあって実の父母に向けられている点を明確にしたことは、日本の孝文化の特徴を的確に捉えていて貴重な指摘である。

第四の成果としては、平安から中世にかけての物語文学を対象とするばかりでなく、公的な場での平安漢詩、特に積奠詩や「書始」の儀式での漢詩群を補完的に分析することで、多様なジャンルにおける孝文化を明らかにした点が挙げられる。天皇を中心とする公的な空間の中で、『孝経』に関わる漢詩群は、王権を讃えて政治体制を維持するなど、伝統的かつ制度的な文化装置としての役割を果たしているのである。

第五の成果は、第三部第四章で中世王朝物語である『松浦宮物語』を取り上げ、主人公氏忠における「孝」と「忠」の葛藤に、玄宗皇帝の寵臣となりながら帰朝できなかった阿倍仲麻呂の事跡の投影をみるという斬新な指摘をした点である。さらに作者の定家が、当時の時代背景として自ら見聞した武士の「忠」の思想をも採り入れることで、『松浦宮物語』が中世軍記物語の先蹤となったことを論じた点も評価できよう。

このように優れた面を備えた本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

本論文では、田中徳定など先行研究と異なる立場から「孝」の問題を追求しようとしたため、仏教における孝養の問題がやや等閑にされた感がある。また六国史など歴史上の史料と文学、文学の中でも漢詩と物語というジャンルの差異をひとまず理解した上で考察しているものの、その位相差や相互関係が曖昧なままで分析が進められた箇所がある。

他にも、古典文学での「孝」への考察が、作品世界の中での分析にとどまる部分があり、平安時代の孝文化とは何かという結論について、もう少し突き詰めて書き込む必要があるのではないか。今後の孝文化の考究のためには、日記文学や和歌など他のジャンルの文学、絵画や音楽など他の芸術にも視野を広げる必要もあろう。

さらに平安の漢詩と物語文学についての「孝」の分析が男性中心であり、女性の「孝」の分析が第二章第五節にとどまっている点が挙げられる。男性作家と女性作家による「孝」の描き方の差異も、今後の課題となろう。

しかし、こうした問題点は、本論文の各章がもたらした学術的成果の価値を大きく損なうものではない。特に各論に見られるオリジナルな着眼点が今後の当該分野の研究に貢献する可能性は大きく、また個々の問題点については、趙氏にも十分な自覚があり、今後の

研鑽によって克服されることが期待される。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、趙秀全氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 河添房江
尾方一郎
高橋忠彦

2013年1月21日、学位請求論文提出者、趙秀全氏の論文『日本文学の中の孝文化—平安時代を中心として—』に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、趙氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、趙氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。